

11-8 弥生鉄器の諸問題

村上恭通

1 鉄器の器種と組成

二子塚遺跡における弥生時代後期の鉄製品は、素環頭短剣、小型短剣、鉄鏃といった武器、大小の袋状斧、鉈、刀子、棒状鉄器といった工具、鋤先、摘鎌、曲刃鎌といった農具からなる。利器がほぼ完全に鉄器化している様相がうかがえ、菊池川流域の山鹿市方保田東原遺跡、玉名郡菊水町諫訪原遺跡、白川中流域の菊池郡大津町西弥護免遺跡、熊本市山尻遺跡（運動公園遺跡）等と同様の様相を呈している。

鉄製品はすべて鍛造品であり、在地生産品と考えられ、北部九州でしばしば遭遇する二条突帶鑄造鉄斧や大型板状鉄斧等、中国東北地方や朝鮮半島製品は含まれていない。弥生時代中期までは舶載鉄器が散見されるが、後期になると舶載鉄器がなくなる点もまた熊本県域の特徴である。したがって、鉄素材を入手し、鉄器を自給的に生産するシステムが確立していたとみることができよう。

2 鉄鏃について

白川上流域の阿蘇外輪山に囲まれた地域では、阿蘇郡阿蘇町下山西遺跡にみられるように、石鏃、石庖丁、大型蛤刃石斧（両刃石斧）等の器種に磨製石器の存在が知られている〔島津・高谷 1987〕。磨製石鏃、石庖丁は鉄鏃、摘鎌と共に機能を同一にする鉄製品と石製品が共存していたことを示している。また、磨製石器生産は、その出土量からみても、依然として継続されていたと考えられる。その点、二子塚遺跡における磨製石鏃や石庖丁はその数もわずかであり、仮に磨製石器生産を認めた場合でも、利器生産の中で占める割合は鉄が圧倒的に高かった。粘板岩製磨製石鏃と鉄鏃は、機能や使用目的を違えて存在するほどのものではない。にもかかわらず、阿蘇山周辺や大分県大野川上中流域の弥生時代後期集落遺跡では磨製石鏃も鉄鏃も共に一定量存在し、機能や使用目的を違えていた可能性がある。これに対し、二子塚遺跡の磨製石鏃はきわめて客観的な存在であり、その材質や色が稀少価値を高めたものとして受容された、とも考えられる。自然に産出される石材を用い、製作地において付加価値を与えられ、さらに価値が高まった磨製石鏃は、最高の必需物資である鉄を用い、最先端の技術で生産された鉄鏃以上の価値を有していた可能性を考えておきたい。

そうすると、基本的に弓矢に採用された鏃は鉄製だったのである。この鉄鏃には有茎式と無茎式があり、その大きさと形態も多様である。弓矢というと一般的に武器と評される傾向が昨今強いが、弥生時代後期中葉以降、広域の開墾を伴って動物の生息域に割り込んだ集落は、集落と食料生産域の周囲に動物の生息を固定化することとなったであろうから、とりわけ狩猟の必要性が高まったであろう。したがって、狩猟具としての弓矢、そして鏃は必需品として存続していたのである。具体的にどの鉄鏃を狩猟具と認めるかは困難であるが、無茎式の五角形鏃や三角形鏃等、小型で単純な形態の鉄鏃はその有力候補である。

一方、小型品、大型品にかかわらず、複雑な形態をもつ無茎式鉄鏃が多いことも、二子塚遺跡の特色である。大津町西弥護免遺跡や熊本市内の諸遺跡でいわゆる二段逆刺式の存在は知られていたが、それらは幅に

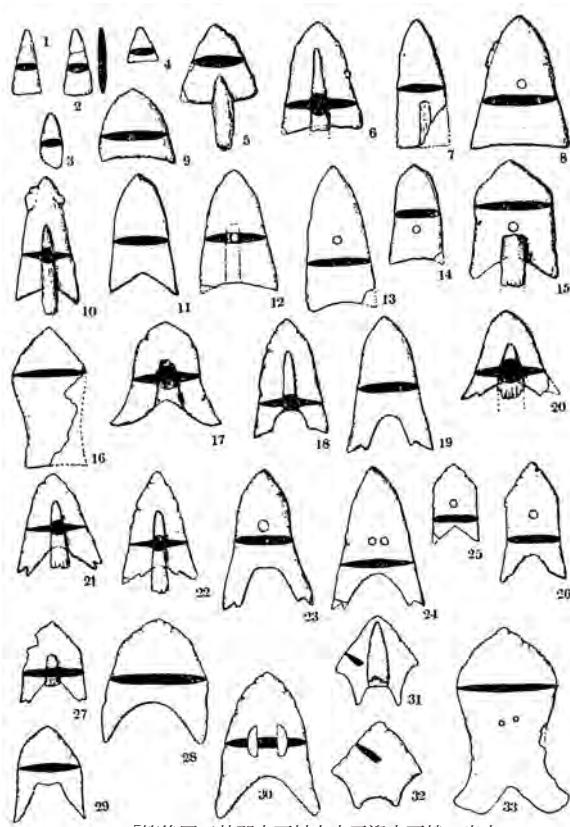


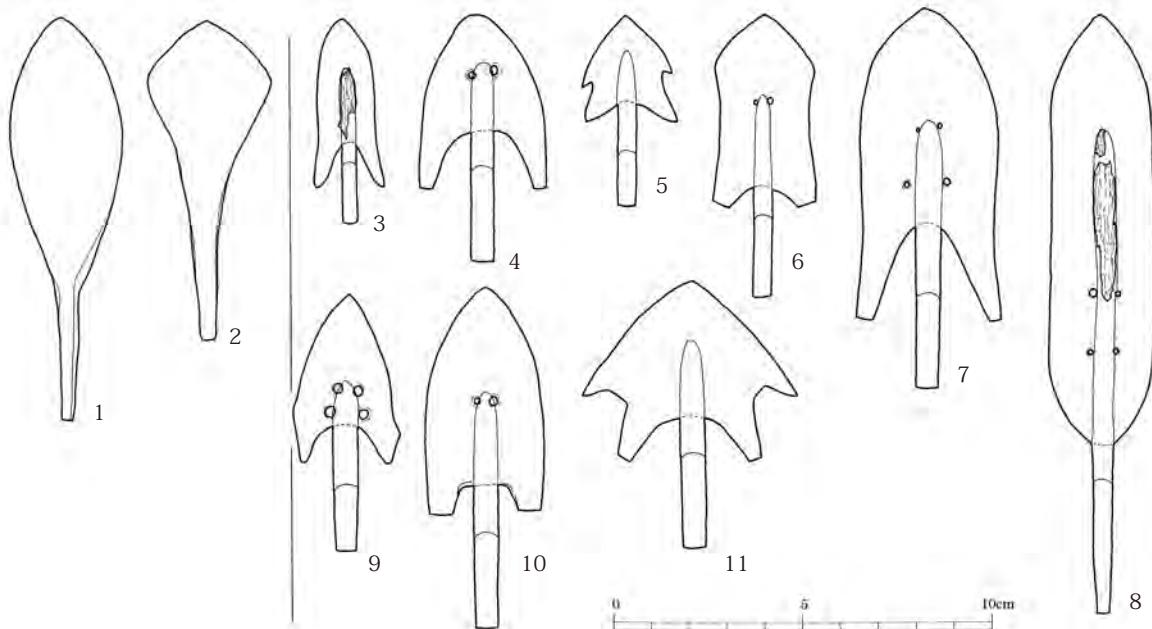
Fig.1 古墳出土無茎鉄鏃集成図(後藤 1939)

31,32「筑後国三井郡立石村大字千鶴字下鶴」出土
33「日向国西白杵郡田原村」出土

対して長い細身の鉄鎌であった。二子塚（SB31）出土の二段逆刺式は全長2.8cm、幅2.4cmであり、幅広となっている。後藤守一氏が上古時代鉄鎌として紹介した「筑後國三井郡立石村大字干潟字下鶴」出土の鉄鎌は二段目の逆刺の伸びの方向と逆刺部の幅が異なっているものの、長幅比は二子塚SB31出土例に近い〔後藤1939〕。ただし、大型のSB116出土例はこの筑後国例に形態も近くなっている。有明海に面した筑紫平野との関連性を想定することができる。またSB235から出土した、ふくらを有し、2個の緊縛孔を穿ち、一段逆刺無茎式鎌も後藤氏が検討した鉄鎌に類例がある。それは後藤氏が「日向國西臼杵郡田原村」出土として紹介した例である。刃部の曲線や逆刺の形態が異なる点ではいるものの、緊縛孔が左右対称ではない点まで共通しており、近年把握されつつある弥生時代鉄鎌のコルプスの中では最も類似している。田原村は現在の高千穂にあたり、こういった地域との関係も視野に入れる必要があるのであろう。

この他、緊縛孔を2個ないし8個有する大型無茎式鉄鎌が注目される。この緊縛孔は阿蘇郡阿蘇町狩尾の湯ノ口遺跡より昨今出土している無茎式鉄鎌から察すると、矢柄そのものではなく、矢柄に挿入する根ばさみを固定するためのものであったと考えられる。こ

の根ばさみは、二子塚出土例（SB39、SB57、SB70、SB211）からみても竹製ではなく、身のつまつた樹種で作られたことを示している。湯ノ口遺跡出土品の場合、鎌身を挟む根ばさみの直径は先端付近で0.6cm、鎌身中位あたりで0.8cm程度あり、その太さは実際の使用場面では対象物に射込まれた場合、接触面との間に強い摩擦を生み出すため、機能性を低めるものとなつたであろう。また根ばさみを装着していたと考えられる二子塚の大型鎌は錆化と土の付着による誤差を斟酌に入れる必要こそあるが、10gをはるかに超える重量をもっており、目的に叶うように矢を操るには適當とはいえない大きさである。したがつて、以上の複雑な形態や通常より大型の無茎式鉄鎌は弓で射るという実用の鎌ではなく、装飾性の高い視覚に訴える鎌であり、護符として、あるいは祭祀や儀礼に用いる鉄鎌であったと考えておきたい。なお、矢柄に挿入する以前の根ばさみを装着した状況を想定すると、バリエーションは有茎式鉄鎌に比べてはるかに豊富である。例えば古墳時代にみられる二段逆刺式の有茎鎌等は、無茎二段逆刺式に根ばさみを装着したものがモデルとなった可能性等も考えられるのではなかろうか。弥生時代の中九州では集落出土鉄鎌の方が副葬鉄鎌より多様性をもつ傾向があり、副葬品が卓越する古墳時



1・4・10: SB243, 2: SB90, 3: SB39, 5: SB31, 6: SB235, 7: SB211, 8: SB57, 9: SB236, 11: SB116

Fig.2 最大級の有茎鎌と根ばさみ装着無茎鎌(想定図)

代の鉄鎌とは簡単には比較できないが、このような観点をもって今後の資料の増加を待つてあらためて検討したい。

3 短剣について

二子塚遺跡では素環頭短剣（SB212）と小型短剣（SB212、SV）が出土した。

熊本県域では素環頭刀子が刀子全体の中で占める割合が高い。中国漢代の素環頭刀子に比較すると小型であり、鋒、棟、関、素環頭の造りははるかに甘い。また断口を有する資料の観察によれば、薄く、錆膨れを呈する場合でも二枚に分かれる程度であり、漢代刀子のように小型品でも丁寧な折り返し鍛打を施した例とは異なっている。したがって大陸の素環頭刀子をモデルとして中九州で製作されたものと判断する。ただし、大陸とはいっても朝鮮半島南部、つまり韓国では鹿角柄刀子が卓越する傾向が強く、素環頭刀子の普及は低かったと思われる。そうすると楽浪郡、帶方郡あるいは中国遼東地方の公孫氏等の領域におけるこの種の鉄器が模倣対象となつたのではなかろうか。

二子塚遺跡では、有茎刀子のみで素環頭刀子はないものの、熊本県域でも唯一となる素環頭短剣が出土した。素環頭剣は中国国内で前漢代以降の例が散見されるが、なかでも遼寧省三道壕村落遺跡で出土した例や韓国慶州市政来洞遺跡出土品等が類品として挙げられる。ただし、いずれも二子塚遺跡例に比較して長大であり、政来洞遺跡例は実見したところ、かなり重厚な造りとなっている。二子塚遺跡例は素環頭部の形成に丁寧さがみられるものの、剣身は素環頭刀子と同様、あまり折り返し鍛打を加えずに成形された薄い造りとなっており、これもまた在地生産品の証左となろう。

中九州は素環頭刀子の卓越や素環頭短剣の存在等、北部九州とはやや異なる様相を呈しているが、これは中国東北地域や朝鮮半島と独自の交渉を行っていたことに起因するのかもしれない。北部九州に比べて鋳造鉄器や板状鉄斧等の船載鉄器が少ないという先の指摘も同様の理由によるものであろう。島津義昭氏は先学の論考を挙げつつ、熊本県域で大量に出土するジョッキ形土器の系譜を楽浪郡、遼東郡に追いかけている〔島津 1990〕。鉄器の問題についても、同様の視座が求

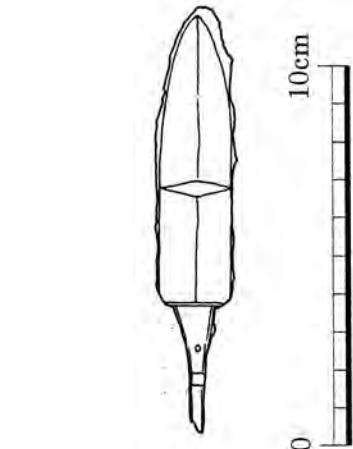


Fig.3 囲山遺跡出土小型短剣
(富山県教育委員会 1970)

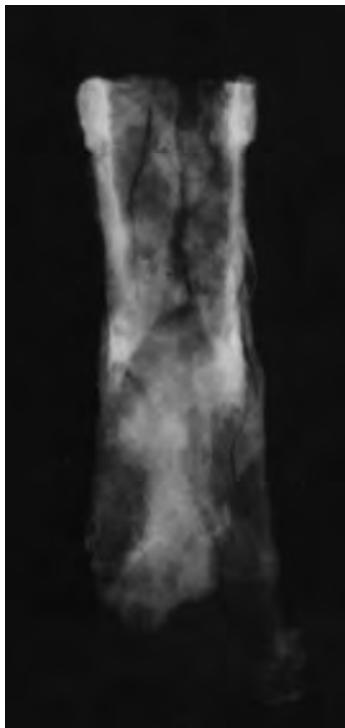
められている。

さて、2点の小型短剣も熊本県内ではじめての出土となった。いずれも短茎式短剣をそのまま小型にした短剣である。下山西遺跡例のように鉄短剣は一般的には副葬品となる例が多いが、二子塚遺跡では素環頭短剣にしろ、この小型短剣にしろ、住居址内に遺棄ないしへ廃棄された例となる。大きさが近似する小型短剣の例としては、富山県圍山遺跡3号土壙墓出土短剣が挙げられる〔富山県教育委員会 1970〕。围山遺跡例は剣身が厚く、関と茎の境に把口を止めるような平坦部が作り出され、細身の茎には目釘穴を通すための短孔が穿たれている。造りの良さ、副葬品といういずれの点も二子塚遺跡例と異なっている。大きさのみではなく厚みの点でも実用からほど遠い短剣を製作し、先述した多様な無茎式鉄鎌と同様に護符であったり、祭祀・儀礼用であった可能性を想定しておきたい。ただし、そう認めた場合でも現状では二子塚遺跡のみに限られた遺物であり、遺跡あるいは地域が限定された存在であったことも考えておかなくてはならない。

4 鉄製工具類について

鉄製工具類としては袋状鉄斧、鉈、刀子がその主なものとしてあげられる。一般的にみられる細身の袋状鑿を欠いている点は留意しておきたい。

袋状鉄斧は中型、小型品が多く、中型品は膝柄を装着して手斧として、小型品はむしろ直柄をつけて鑿と同様の使用がなされたものと推測する。大型品は1



SB214 出土品 撮影：名古屋大学考古学研究室

Fig.4 袋端部を折り曲げた袋状鉄斧
(軟エックス線写真)

られていない。通常の住居址で微小な鉄針、鉄錐を検出することはきわめて困難である。しかし、二子塚遺跡では、床面の土を水洗したり磁石を利用する等の方法を採用した住居址調査において、その存在を確認することができた。弥生時代の日用鉄器として、このように微小な加工具の存在は普遍的であったといえるであろう。

[参考文献]

- 後藤守一 1939 「上古時代鐵鏃の年代研究」『人類學雑誌』54－4、東京人類学会
島津義昭 1990 「「ジョッキ形」土器小考」『郵政考古紀要』16、郵政考古学会
島津義昭・高谷和生編 1987 『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告 88、熊本県教育委員会
富山県教育委員会 1970 『圓山遺跡』小杉町圓山遺跡緊急発掘調査報告書、富山県教育委員会

点の刃部破片が知られているのみであるが、これは伐採斧の刃部と考えてよからう。

二子塚遺跡で出土した袋状鉄斧は、端部を折り曲げて袋部の強化を図ったものが卓越している。この種の鉄斧は、現状では福岡、佐賀よりも熊本県域の出土例が多い。後述するように、炭素分の低い軟鋼を素材とするためにこの技術を維持せざるを得なかったのであろう。これは、北部九州と中九州とで消費される鉄素材の質の違いとも関連する問題である。

鉈は、いずれも裏すきを有するものであり、弥生時代終末期以降に散見される鎧頭状の先端を有する鉈は受容していない。また、刀子は白川流域で頻出する素環頭刀子ではなく、有茎刀子に限られていた。

二子塚遺跡の鉄製工具で特に注目されるのは、多様な先端部をもつ棒状鉄器である。これらには針、錐、鑿等の機能が想定される。鉄錐は玉生産に関わるもののが注目されているが、日常生活においても必要とされたはずである。鉄針についても副葬品として出土する例が知られているが、生活址での出土品はほとんど知